

東播磨地域における溜池と小学校との関わり

渡邊 幸太

キーワード：溜池，小学校，いなみ野ため池ミュージアム，東播磨地域

1. はじめに

全国には、20 万を越える農業用溜池が存在する。一つ一つの溜池は、農業を中心とする営みの中で、先人によって長い時間と膨大な労力をかけて造り上げられ、これまで守られてきた。そして、豊かな自然の一部となり、農業用水だけでなく、洪水調整や景観形成、多様な生物が棲む空間など多面的な機能を有している。また、地域の人々の交流や文化を育むものとして、私たちの暮らしを支えてきた。

溜池についての先行研究としては、防災や環境保全に関する研究、溜池の存続やその維持管理に関する研究など、多くの文献研究や論文がある。内田（2003）は、溜池の水質汚濁や災害の発生の危惧から、今後の溜池の保全や課題を明らかにしている。また、南埜（2011）は、溜池に関わるプロジェクトや新しい維持管理組織から、今後の溜池の存続とその維持管理について明らかとしている。近年では、笠（2005）が社会科において、単元開発を行うなど、溜池と教育との関わりについても論じている。

平成 20 年度版小学校学習指導要領では、「我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て」ることを社会科の目標として示されている（文部科学省，2008）。そこで、本研究では、地域の人々との生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解し、子どもたちが我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育むことができるように、教育の視点から、地域に着目し、研究を行う。

溜池は、特に灌漑に利用する目的を持っている、地域の資源である。この資源は水路という共同施設を通じて各水田に配分される。それを可能にするため、地域の発展に尽くした先人の働きがある。本研究では、この溜池という伝統的な地域資源を取り上げ、溜池と地域との関わりから、溜池灌漑卓越地帯に属する東播磨地域を事例に、小学校の教育への活用のあり方を明らかにする。

東播磨地域では、カイボリといった溜池の水を抜く作業が行事として行われている。しかし、近年では、農家の減少による人手の不足もあり、溜池の管理が困難となり、行事であるカイボリも行われなくなってきた。だが、カイボリは溜池の維持管理や地域の結びつきにおいて、重要な役割を果たしている。そこで、東播磨地域における溜池の動向と現状を踏まえた上で、子どもたちと溜池との関わりについて取り上げる。かつては子どもにとって身近な存在であった溜池が、学校を通しての関わりが中心となってきたことから、溜池を小学校の教材として活用するための研究事例としても位置づける。

研究方法は、まず、溜池に関する文献や資料を収集し、東播磨における溜池の動向と現状について検討する。次に、東播磨地域で溜池を有する地区の溜池管理者や、溜池を教材として扱っている小学校の教員へ聞き取り調査を行う。

2. 東播磨地域の溜池

(1) 東播磨地域と溜池

東播磨地域は明石市、加古川市、高砂市、稲美町、播磨町の3市2町からなり、気候は、温暖で降水量が少ない瀬戸内式気候に属している。明石川から加古川に至る「いなみ野台地」は、古くより水不足に悩まされ、水を得るための技術が発達し、溜池などが整備されてきた。東播磨地域には、県内最大の加古大地（稲美町）や、675年に築かれたという記録が残る県内最古の天満大地（稲美町）をはじめ、アサザやオニバスといった絶滅が危惧される動植物が生息する溜池、ウォータースポーツが楽しめる溜池など、個性豊かな溜池が数多くある。

その多くは水路で結ばれ、群れをなして存在している。とりわけ、いなみ野台地の溜池群は、日本有数の溜池密度を誇り、水路網とあわせて文化庁の「文化的景観180カ所」、地球環境関西フォーラムの「関西の風景100選」、農林水産省の「ため池百選」や「疏水百選」にも選定されるなど、文化財としても大変価値のあるものである。

東播磨では、「溜池」やそれを結ぶ「水路」を、農業者はもとより、地域住民、企業、実践活動団体、教育関係者や行政等が、地域のかげがえのない財産として、“守り、活かし、次代に継承する”地域づくりの取り組み「いなみ野ため池ミュージアム」を進めている。

(2) いなみ野ため池ミュージアムとその取り組み

「いなみ野ため池ミュージアム」は、50を越えるため池協議会で設立され、溜池への関心を高める活動を行っている。ため池協議会は、農家だけでなく地域の自治会や学校、企業・NPOなども参加する新しい形の維持管理組織である。ため池協議会の主な活動として、①ため池クリーンキャンペーン（溜池管理者と地域住民が協働で溜池清掃活動を実施）、②ため池保全活動（貴重な動植物の保全活動）、③ため池交流活動（水辺を交流の場として活用する多彩な地域交流イベント）、④ため池協議会のネットワークづくり（懇談会開催などにより、地域課題を共有し、意見交換を行い、各ため池協議会をつなぐネットワークづくり）が挙げられる。この活動は、東播磨地域でも市町によって様々である。本研究においては、「カイボリフィールドワーク」を行った加古川市ため池協議会の活動を事例に取り上げる。

このような活動や溜池文化を次代に引き継ぐために、溜池を中心に地域全体がつながり、その維持や管理、活用方法を話し合う必要がある。溜池は、いまや農業用水の供給という本来的な機能のほか、多様な価値をもっている。これらを地域の財産として考え、この水辺空間を次代に残すためには、ただ危険な場所としてフェンスで囲い生活空間から隔離するのではなく、身近な存在として活用していく必要がある。

これらの必要性から、「いなみ野ため池ミュージアム」は、歴史的な水利遺構や水辺の生き物・景観、地域の文化や住民の生活などの資源を地域全体の博物館としてとらえている。それらを次代に受け継ぐとともに活用し、魅力ある地域づくりを目指すことを目的として、2004年に設立され、2012年の時点で88の団体が参加している。いなみ野ミュージアムは、2008年から環境省が進める「生物多様性保全推進支援事業」により積極的にカイボリ作業などを行っている。その際はカイボリだけでなく、地域住民などに向けた溜池学習会や、溜池のクリーンキャンペーンなども行っている。

こうしたいなみ野ため池ミュージアムによる積極的な働きかけが、今後の東播磨地域の溜池におけるコーディネーターとして、地域住民や行政、溜池管理者など、様々な主体を巻き込むといった重要な役割を果たしていると考えられる。

3. 溜池と小学校の関わり

本研究では、小学校との関係を有する地区の溜池管理者2名、溜池を教材として扱っている小学校教員2名、兵庫県東播磨県民局職員から聞き取りを行う。溜池管理者に対し、東播磨地域における溜池と住民との関わり、組織管理などについて聞き取りを行う。それらを踏まえて、なぜ、現在子どもとカイボリを行うのか、共に行うことで何を伝えたいのか、管理者側の目的やメリットは何か、運営上の問題点や安全性について聞き取りを行う。また、地域の小学校で溜池を教材として扱っている教員には、溜池についてどのような学習を行っているのか、学年での取り組みはあるかなど、小学校の教育における溜池の活用について聞き取りを行う。そこで、パンフレットやホームページならびに関係者からの聞き取りをもとに、実際に行ったカイボリ作業を通して、溜池と小学校との関わりについて検討する。

(1) 溜池管理者と小学校との関わり

富木地区の事例として、2013年7月9日、7月30日に聞き取り調査を行った。溜池管理者であるA氏は、加古川市西神吉町鼎の富木地区において、富木営農組合長、及び富木地区環境保全協議会の会長を務めている。A氏はカイボリなどの活動だけでなく、地域の集会所にて「ため池環境学習会」、「メダカのコタロー劇団」による小学生、幼稚園児への農村環境学習を行っている。

富木地区では、カイボリを行う際、地域住民に呼びかけを行い、耕作者においては、このカイボリ作業に自主的に参加している。カイボリを通し、農家同士のつながりや地域の人々との関わりが深まっており、カイボリは決して切り離せない存在である。東播磨県民局の方の話においても、カイボリに参加する理由として、カイボリの重要性を知るため、カイボリの情報を発信していくために、カイボリに参加していた。しかし、このように仕事として参加していたのであるが、徐々に人とのつながりができることで、仕事やボランティアではなく、人とのつながりを求め参加するようになった。

富木地区は、2010年のカイボリから、新たに地元小学校のイベントと連携し、じゃこ捕りや環境学習を行っている。2013年は、地元小学校のカイボリへの参加はなかったが、これまでは地元中学校や高校の生物研究部などの子どもの参加があった。

小学校とのイベントを行う理由として、溜池の危険性を理解してもらうためと述べている。富木地区の溜池は、カイボリなどの活動を通して、点検や管理がきちんと行われており、子どもが溜池を見やすいように整備している。しかし、全国的に見れば、溜池の管理がきちんと行われている所は少なく、溜池を危険な場所として子どもたちに伝えるのは残念だと述べている。

次に、イベントとしてカイボリを行う理由は、干しあがった池に残った魚を捕獲し、どのような生物がいたかを子どもたちに知ってもらうためである。また、水利施設の機能点検を行うことと併せて、栄養たっぷりの溜池で育った魚を食べることは池の水質浄化につながり、池の水で作られたお米の味を味わってほしいと述べている。

このカイボリを子どもたちと共に行うことで、カイボリという伝統を引き継ぎ、更に近隣地域にも広げていきたいと述べている。また、子どもたちを含めて地域全体で取り組むカイボリは、全国的にも珍しく、溜池やカイボリの重要性の情報を発信していく上で、大きな役割を果たしているとのことである。しかし、子どもとカイボリを行う上で、運営上の問題点や安全性については重要なものとなる。上記の通り、溜池は危険性を含んでおり、整備をされていても水がある場所は特に危険である。そこで、地域の人々や大人の監視が必要となる。そこから、子どもとカイボリを行う上で、地域の人々の協力は不可欠である。

西牧地区の事例として、2013年7月30日に聞き取り調査を行った。B氏は、西牧ため

池協議会の元会長であり、志方西小学校の溜池学習に携わる人物である。溜池の多いことで知られている東播磨地域の北西部に位置する加古川市志方町西牧集落は、10ヶ所の溜池を管理する農村地域である。

西牧では集落ぐるみで溜池周辺に桜や花を植栽したり、魚・昆虫・植物などの自然観察会（年1回）を開催したりしている。B氏は他に、溜池周辺の清掃・草刈りを含めた環境保全活動（クリーンキャンペーン）に併せ防災訓練と炊き出しを行うなど、集落全体が一丸となって総合的な活動を展開している。

B氏もまた、子どもたちを巻き込み、溜池の重要性を教える人物である。地元である志方西小学校で、授業を通し、子どもたちに溜池を教えている。B氏が溜池について教える理由として、若い人（特に小学生などの小さな頃）に、溜池の重要性を知ってもらいたいからだと述べている。志方町において溜池は身近なものであるが、子どもたちは溜池について知らない。そこで、先人達が残した溜池の歴史などのすばらしさを知ってもらいたいとの思いから、小学校で溜池を教えている。

次に、小学校で行う溜池の授業についてである。小学校では、溜池学習の授業のうち、B氏が1時間ほどクラスの中で授業を行っている。その内容としては、地元の溜池の名前や場所、特徴など、それに加え、A氏と同様に溜池の安全性の問題についても教えている。そこで、子どもたちの理解がより深まるように、クラスの班ごとに溜池についての質問事項などを模造紙にまとめさせ、B氏がそれに答えるといった工夫も行っている。

B氏だけでなく、いなみ野ため池ミュージアムの職員も交え2時間ほど、水質検査や生物についてなどの授業も行っている。そこでは、子どもたちにより分かりやすく興味を持ってもらうため、スライドや映像資料を使うなどの工夫をしている。このような溜池学習は、子どもたちからの反応も良く、B氏は「溜池のおじさん」として子どもたちから親しまれ、小学校や子どもたちとの関わりを深めている。

（２）小学校における溜池としての教材

溜池学習を実施する西神吉小学校の事例として、2013年7月30日に聞き取り調査を行った。西神吉小学校は、溜池学習を授業で取り入れ、2010年から2012年の3年に渡り、富木地区のカイボリに参加した小学校である。そこで、溜池を教材として扱っている小学校教員C氏から聞き取りを行った。

西神吉小学校が行う溜池学習について、主に第4学年の社会科の授業で、溜池学習を行っている。第3学年の社会科における地域学習から発展させ、第4学年から地域で身近な溜池について学習している。先人が地形の高低差を利用して水を引いてきた工夫など、地域学習を通して学習している。ここでの学習の目標としては、地域の人々との関わりをもつとともに、地域の発展に尽くした先人の思いや願いを学び、活かすことである。指導計画においても、第3学年と第4学年の2年間を見通して作成されており、学校や地域の関わりをより密着させている。

子どもたちは溜池について、第3学年では主にプリントを用い、人々の暮らしから、願いや知恵、努力などを学ぶ。そして第4学年から、第3学年での学び（人々の暮らし）を生かし、地域の用水路や田んぼから、先人の工夫を考察するなどしている。ここで、地域学習においてのフィールドワークを行い、実際に用水路や田んぼ、溜池を訪れ、これらの歴史を学ぶことで、今後地域にどのようにこの歴史や先人の工夫を伝えていくかを学んでいる。

すでに述べたように、西神吉小学校は2010年から2012年の3年に渡り、富木地区のカイボリに参加した小学校である。西神吉小学校では、授業で溜池を教材として扱っているが、カイボリは学校行事として行っている。カイボリに参加するきっかけは、前校長の意

向と子どもが身近な地域での喜びを味わうことができるからである。子どもたちは、カイボリに参加することで、地域の人々と捕れた魚と一緒にいただくなどして、交流を深めることができる。また、授業を越えて、体験学習として溜池を学ぶことができるとともに、本来の溜池の歴史や役割を思い出すことができるという点で、カイボリというものが大きな役割を果たしている。

しかし、カイボリに参加する上で、安全性についても配慮する必要がある。学校側は子どもの人数を把握し、池以外の例えば更衣（溜池で作業を行うための着替え）を行う場でも、地域の人々の協力も経て監視をしなければならない。教員は、初めてカイボリに参加する際はとても心配であったが、これまで思ったほどの混乱はなく、地域の人々の協力に感謝していると述べている。また、富木地区以外の管理されていない溜池などは、危険であり人々の協力も得ることは難しいため、参加するのは困難であるとも述べていた。

カイボリを行った児童の反応について聞くと、自分で魚を捕って食べることや、地域の人々との交流を通して、とても楽しくカイボリを行っている。このカイボリは第4学年の児童を中心に参加しているが、4年生以上の希望者も増え、毎年40人以上の子どもが参加している。このような溜池学習やカイボリを行う上で、子どもたちがよりよい学習や楽しさを味わうことができるように、溜池管理者とも連携を行っている。

溜池学習を実施する志方西小学校の事例として、2013年11月19日に聞き取り調査を行った。東播磨地域の北西部に位置する加古川市志方町は、多くの溜池が存在し、それぞれの地区に特徴的な溜池を有している。志方西小学校も西神吉小学校と同様に、溜池を身近に感じることができる地域にあり、溜池を教材として扱っている小学校である。そこで、B氏と連携して溜池学習を行っているということもあり、B氏の紹介で志方西小学校の教員から聞き取りを行った。

志方西小学校では、主に第4学年の総合的な学習の時間において、溜池学習を行っている。総合的な学習の時間ということで、他教科とも関連させ、第3学年の社会科における地域学習や理科における生物学習から発展させ、第4学年から地域で身近な溜池について学習している。ここでの学習の目標としては、志方町に溜池が多いことを理解し、そこから郷土に対する愛着をもち、地域の人々との関わりをもつことである。指導計画においても、第3学年と第4学年の2年間を見通して作成されており、体験活動や交流の場から、学校と地域の関わりを深めている。

子どもたちは授業の中で、第4学年では主に、導入として実際に溜池を訪れる体験学習、パソコンを使って溜池について学びまとめる個人学習、地域の人や溜池の専門家など校外の人と交流できる学習を行っている。教員D氏は、実際に地域の溜池を訪れ、地域の溜池について学び、地域の人から話を聞くことで、身近な存在である溜池を「実感」してほしいと述べている。

志方西小学校は、志方町で2013年7月1日に行われたジュンサイ祭りに学校行事として参加した。最近では、ジュンサイがとれる池が少なくなっているが、志方町永室地区の「中の池」では、毎年、池一面にジュンサイが育っている。そこで、ジュンサイを採集するとともに、池を大切にすることを育てようと「ジュンサイ祭り」が開かれており、溜池を学ぶ志方西小学校も子どもたちから希望者を集め、このイベントに参加している。

当日は、ゴムボートでジュンサイとりの体験をしたり、貴重な水生生物の観察をしたり、子ども達にとっても貴重な体験や学習の場となったと述べている。他に、地域の方々の炊き出しやジュンサイを使った料理、そうめん流しなどもあり、子どもたちの反応もよく、ジュンサイ祭りに参加した子どもたち（5名ほど）に尋ねたところ、来年もぜひ参加したいと述べていた。

志方西小学校におけるこれからの溜池学習の見通しとしても、B氏や県民局、地域の方々とのつながりがあることから、今後も溜池学習を続けていくとのことである。また、ジュンサイ祭りといった地域でのイベントにおいて、多くの人たちと交流や体験を行うことができることから、溜池学習は重要なものとなっている。

(3) カイボリフィールドワーク

2013年11月4日、兵庫県加古川市富木地区において、「カイボリフィールドワーク」を行った。富木地区では、溜池の維持管理や外来種の管理、水質浄化のためだけのカイボリではなく、それに加え、溜池の管理を通じた地域連携の向上も目指している。当日も、自主的に参加した小学生をはじめ、カイボリフィールドワークを行う我々大学生やたくさんの地元の方々に参加していた。

地元の方々で交流しつつ、干し上がったコイやカメ、カエルなどを捕獲してまわった。捕獲されたコイなどの生物は、その場で調理され参加者に振る舞われた。そこで捕れた生物をその場で食べるというのが、この富木地区でのカイボリの大きな特徴ともなっている。この地区では、溜池管理をそこに住む生物を食べるというイベントとして打ち出すことで、溜池管理に必要な地域社会システムの維持を図ろうとしていると考えられる。

午前のじゃこ捕りを終えると、地域の人々によって、豚汁やその地域でとれたお米を使ったおにぎり、先ほど捕れた生物などが料理として、カイボリ作業を終えた人々に振る舞われた。これらの振る舞いも、地域の人々とのつながりを大切にするこの地区において、重要な役割を果たしていると考えられる。

昼食を終えると、本学の学生や溜池管理者であるA氏を含め地元の方々、東播磨県民局の方による質疑応答と意見交換が行われた。学生からは、「溜池の水をどのようにして貯水し放水するのか」や「カイボリをする際にどのように地域住民に呼びかけているのか」など、主に溜池そのものやカイボリについての意見や質問が多く挙げられていた。また、地元の方々や県民局の方からは、「カイボリを行うことができていない池が多くあること」や「溜池工事にかかる費用」など、主に溜池管理の現状や助成金についての話を聞くことができた。これらの話し合いから、東播磨地域における溜池の現状について、カイボリを行うことでの管理について理解できた。しかしこれらは、決して地域住民をなしに話を進めることはできない。農家同士の方の付き合いや地域の人々との関わりがあってこそ、管理やカイボリを行うことができるのである。

4. 考察

(1) 溜池管理者と小学校との関わり

東播磨地域では、これまでカイボリの行事を通して、溜池と地域の関わりを深めてきた。それにおいてカイボリは、子どもが地域の人々との関わりを持つことができる、よい学習の教材であると考えられる。しかし、西神吉小学校では、2013年からカイボリを休止することとなった。その理由としてC教員は、これまでのカイボリを通して、捕れる魚が徐々に少なくなってきたからと述べている。そのため、この2013年はカイボリに参加せず、来年の溜池学習の方向性を決定するため様子を見るとのことであった。また、志方西小学校の教員も、溜池学習は続けていくが、見直しは必要だと述べている。それは、農家の減少とともに溜池の必要性が減った現状において、子どもたちが溜池に興味を持ったり、愛着をもったりすることは難しいことをあげている。

B氏が小学校に対し、カイボリの参加を呼びかけない理由については、学校の参加となると、地域の人々だけでなく、子どもたちの親の協力も必要となり多くの負担をかけるからである。また、多くの子どもの監視や学校教育における生物学習などに返還していける

かという大きな不安があるとも述べている。

ここで再度、溜池の重要性について子どもたちが理解するには、子どもたちにとって溜池をより身近に感じてもらうことが求められる。東播磨地域には多くの溜池があるにも関わらず、今の子どもたちは溜池についての知識が少ないことが教員の聞き取りから判明した。それは溜池の必要性の減少など、時代の変化が大きく関わっていると考えられるが、東播磨地域においては溜池の役割も変化しているのである。サーフィンなどのスポーツを楽しむことができる溜池、公園として整備された溜池、安全性と美観を兼ね備えた溜池など、東播磨地域独自の溜池を子どもたちが知ることで、溜池に興味を持つことができると考えられる。溜池学習などを行う以前に、特別活動における学校行事として、遠足などで溜池に足を運ぶなどして、地域の様子を知ることで、その後の授業においても溜池地域に対する誇りや愛情が育つと考えられる。そのためには、いなみ野ため池ミュージアムなどの組織や溜池管理者が、これまで以上に子どもに向けた情報を学校側に発信していくことが求められる。

そこで溜池管理者は、溜池学習の重要性とカイボリの必要性を市全体や地域全体に打ち出すことで、カイボリへの参加を求めることが必要である。カイボリは、小学生が自然環境、水辺生物、地域の農業などを学ぶことができるよい教材である。小学生が溜池に入らずとも、カイボリの様子を見ることが現地で地域の人々の話を聞いたり、交流を深めたりすることが極めて重要な体験学習になると考えられる。

(2) 小学校における溜池学習

本研究では、西神吉小学校、志方西小学校の2校の教員からの聞き取りを行った。その調査において、小学校における溜池学習の妥当性について、小学校学習指導要領から考察する。

西神吉小学校が行う溜池学習は、主に第4学年の社会科の授業で行われている。授業では、人々の暮らしや生活、地域の用水路や田んぼから、溜池を築いた先人の工夫を考察させている。また、地域学習におけるフィールドワークを行い、実際に用水路や田んぼ、溜池を訪れ、これらの歴史を学ぶことで、今後地域にどのようにこの歴史や先人の工夫を伝えていくかを学んでいる。これは、第3学年及び第4学年の内容(5)「地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする。」(文部科学省、2008)を受けたものだと考えられる。

子どもたちは、先人達が東播磨地域における地形を巧みに利用し、土地の高低差を克服する水路をめぐらせ、水を確保するといった工夫を理解し、第3学年及び第4学年の目標(2)「地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できる」を達成できていた。

カイボリは、授業ではなく学校行事として行っているが、本研究では、社会科の学習指導要領から教材としての妥当性を検討する。カイボリは、上記の内容(5)「地域の人々が受け継いできた文化財や年中行事」を調べる具体的な対象として、教材として適していると考えられる。それは、いなみ野台地の溜池群が文化財としても大変価値のあるものとなっていることや、カイボリが地域の人々が長年に渡り受け継いできた行事だからである。

子どもたちはカイボリに参加することで、地域の人々と捕れた魚を一緒にいただくなどして、交流を深めることができている。そこで、体験学習として溜池を学ぶことができるとともに、地域の人々の話などから、本来の溜池の歴史や役割や先人の働きについて学ぶことができるという点で、カイボリは小学校における社会科の授業でよい教材となっていると考えられる。

志方西小学校が行う溜池学習は、主に第4学年の総合的な学習の時間で行われている。授業では、総合的な学習の時間の学習指導要領における全体計画の作成③「各教科等との関連」から、第3学年の社会科における地域学習や理科における生物学習から発展させ、第4学年では地域で身近な溜池について、全体計画③「地域との連携」から、地域の人や溜池行政の専門家の方と交流できる学習を行っている。

学習内容としては、溜池を訪れるなどの体験学習を通して、溜池という自然の偉大さを学び喜びや充実感を実感している。また、パソコンを使って溜池について学びまとめる学習からは、調べたことや分かったことを発表し内容を深めている。これは、総合的な学習の時間における、内容の取扱いについての配慮事項(3)「自然体験やボランティア活動などの社会体験、ものづくり、生産活動などの体験活動、観察・実験、見学や調査、発表や討論などの学習活動を積極的に取り入れること」(文部科学省、2008)に合致している。

これらの授業内容は、体験的な学習を展開するに当たり、児童の発達性を踏まえており、目標や内容に沿って適切かつ効果的なものとなるよう工夫されている。また、児童をはじめ教職員や外部の協力者などの安全確保、健康や衛生等の管理にも十分配慮していることが調査からも理解でき、総合的な学習の時間におけるよい教材となっていると考えられる。

(3) 小学校と地域社会との関わり

東播磨地域では、溜池管理者やいなみ野ため池ミュージアムの結びつきにより、多様な主体が参画する組織となり、その中心的な活動内容も変化している。それは、地域における溜池の維持活動や歴史などにまつわる学習会などの文化活動であることにみられる。洪水調節などの防災機能から、水辺景観形成、レクリエーション空間形成、コミュニティ形成、文化継承、学習・教育といった溜池の機能を中心とする取り組みとなったことがその例である。各地域において、これら溜池をめぐる活動内容は様々であるが、溜池管理者や学校、地域住民が連携して行う活動は、施設管理だけでなく、自然環境等多面的機能の発展を果たしている。そこで、改めて溜池の重要性について、子どもや地域の人々が学ぶべきである。また、カイボリといった伝統を受け継ぎ、それを地域のイベントとして行うことで、子どもや地域の人々が参加し、注目を集めることで、溜池やカイボリの必要性をよりよい情報として発信していくことができると考えられる。

近年、溜池の役割が変化しつつある東播磨地域において、子どもたちが地域の溜池をより身近な存在として実感できるように、子どもと地域の人々が積極的にカイボリなどの行事に参加できるような働きかけをしていく必要がある。それには、いなみ野ため池ミュージアムなどの組織や溜池管理者の連携が不可欠である。そこで、地域の人々が受け継いできた文化財や行事を溜池学習として学校で学ぶことにより、社会教育と学校教育の融合から、今後の新しい小学校の教材として打ち出せると考えられる。

5. おわりに

本稿は、東播磨地域の溜池について、聞き取り調査やカイボリ作業の参与観察などから実態を検討し、また溜池を学ぶ小学校と人々との関わりについて検討を行った。

その結果、小学校での溜池学習は、小学校と溜池管理者、いなみ野ため池ミュージアムなどの組織との連携により行われていることが明らかとなった。溜池学習におけるカイボリなどの体験学習においても、それらの関わりを通して初めて、よりよい教材になるといった考察に至った。

このことは学校教育と社会教育の連携であり、また学校の地域連携という点でも評価できる貴重な学習機会といった捉え方もできる。また、カイボリを通して、溜池管理者と地域住民の関わりが重要であることが判明した。子どもたちによるカイボリへの参加は全国

的にも珍しく、カイボリの重要性を情報として発信していくためにも、いなみ野ため池ミュージアムなどの組織が関わっている点も抑えておかねばならないポイントである。

以上のことから、溜池を学ぶ小学校と溜池管理者を含め地域の人々が、相互の利益を見出し、繋がり、関係を持つことが、子どもたちの教育において重要である。

謝辞

本稿を作成するにあたり、今西幸藏教授、矢嶋巖准教授をはじめとする神戸学院大学の先生方よりご指導頂きました。また、本研究を行うにあたり、聞き取り調査にご協力頂いた富木攻氏、長谷川弘氏、原陽一郎先生、片岡正策先生、兵庫県東播磨県民局職員の皆さまに心より感謝いたします。記してお礼を申し上げます。

引用文献

- いなみ野ため池ミュージアム運営協議会：『いなみ野ため池ミュージアム ～先人の“遺産”を次代の“資産”に～（パンフレット）』、兵庫県東播磨県民局。
- いなみ野ため池ミュージアム運営協議会（2013）：『いなみ野ため池ミュージアム - 10年の歩み - 』、いなみ野ため池ミュージアム運営協議会事務局。
- 内田和子（2003）：『日本のため池 防災と環境保全』、海青社。
- 内田和子（2008）：『ため池 - その多面的機能と活用 - 』、農林統計協会。
- 笠聡一郎（2005）：水利権問題に着目した「開発单元」の教材化 - 「湯の口ため池」の実践を通して - 。全国社会科教育学会『社会科教育論叢』第44集，pp.15-19。
- 南埜猛（2011）：溜池の存続とその維持管理をめぐる取り組み - 兵庫県東播磨地域を事例として - 。経済地理学年報 第57巻， pp.75-89。
- 森本真一・片山俊夫・南埜猛（2008）：『明石のため池』、明石教育委員会。
- 文部科学省（2008）：『小学校学習指導要領解説 社会編』、東洋館出版社。
- 文部科学省（2008）：『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』、東洋館出版社。

引用 URL

- 市町ため池協議会連絡会：いなみ野ため池ミュージアム。
http://www.inamino-tameike-museum.com/02_1_kakogawa.html 2013年11月27日アクセス。
- 富木地区環境保全協議会：ため池王国・東播磨の挑戦。
http://www.inamino-tameike-museum.com/02_1_k21.html 2013年11月27日アクセス。
- 農業共済新聞：兵庫県農業共済組合連合会。
http://www.nosai-hyogo.or.jp/shinbun/2007/0703_04.html 2013年12月1日アクセス。

Relations with ponds and elementary school in Higashiharima area

WATANABE Kota

Key Words : Pond, Elementary school, Inamino tameike Museum, Higashiharima area